Campus Today

松本歯科大学
発行所　学校法人　松本歯科大学
長野県塩尻市広丘郷原1780
☎（0263）52−3100
www.mdu.ac.jp
1部60円

第26回 美容口腔管理学会総会・学術講演会を開催
～ 口腔から紡ぐトータルビューティー ～

口腔の健康と美容に関する研究成果等を発表
シンポジウムは活発な討論を展開

10月4日（日）、第26回美容口腔管理学会総会・学術講演会が本学図書会館学生ホールで開催された。大会長は歯科保存学講座（修復）の亀山敦史教授が務め、「口腔から紡ぐトータルビューティー ―歯科医学と東洋の知恵が拓く美容口腔管理の未来―」をテーマに、研究・教育・臨床の各側面から、口腔の健康と美容に関する講演が行われた。

本大会の開催に当たって、準備委員長の小松佐保講師を中心に、医局員全員が一丸となって各種準備に取り組んだ。学内の関係部署とも連携し、会場設営、受付、企業展示会場の設営、講演機材の準備、当日の進行などを分担して運営に当たった。

午前の一般口演では、歯科保存学講座の宮下　彩助教が、CAD／CAM材料のエアパウダーポリッシング後の表面性状、小松講師が本学の臨床実習期間中における審美歯科教育の概要と展望、小町谷美帆准教授が新規ホワイトニング用ジェルシートの臨床研究結果、をそれぞれ発表した。また教育講演では、大槻昌幸客員教授がホワイトニング関連新製品の情報なども含めたわが国における最新のホワイトニング事情や、ホワイトニングに関連するコンプライアンスに関して詳細に話された。

午後のシンポジウム「多業種から学ぶ美容と口腔管理のエッセンス」では、本学解剖学講座の奥村雅代准教授が、顎顔面の筋と神経の構造・機能について講演したのをはじめ、美顎鍼やリップアートメイクなど、顎顔面の美容に関する幅広い内容を取り上げた。なおシンポジストとして登壇した関根陽平先生は、本学の宇田川信之学長にとって、昭和大学歯学部時代の教え子であったこともあり、宇田川学長と関根先生のディスカッションも繰り広げられるなど、登壇者のみならず参加者も交えた活発な討論が繰り広げられた。

本大会にご参加いただいた皆様ならびに開催を支えてくださった学内外の関係者の皆様に、心より感謝申し上げ、今回得られた学びと交流を、今後の教育や研究、診療に生かしていきたい。

（歯科保存学講座（修復）　助教　高坂怜子）


左から大会長の亀山教授とシンポジウムで講演した関根先生、教育講演を行った大槻先生、宇田川学長

歯科保存学講座（歯周）
金（キム） 奈賢（ナヒョン）助手がポスター優秀賞受賞
吉成伸夫教授が特別講演
第66回 韓国歯周病学会主催の国際学術大会

韓国歯周病学会（KAP）が主催する「2026 JPIS-Evidence Based International Congress-The 66th General Session of Korean Academy of Periodontology」が10月23日（金）から25日（日）まで、韓国のSeoul National University Dental Hospitalで開催された。本大会はKAPの公式学術誌「Journal of Periodontal & Implant Science（JPIS）」の名を冠して初めて開催された国際学術大会で、歯周・インプラント治療をテーマとしている。日本から25人の参加をはじめ、米国、イタリア、タイなどから800人以上の歯周病学に携わる研究者や臨床家が集い、最新の研究成果や臨床知見について活発な討議が行われた。

本大会では、筆者が「A Case of Gingival Recession With Alveolar Bone Resorption in the Anterior Region Following Orthodontic Treatment」の演題名で歯肉退縮の治療法に関する発表をし、ポスター優秀賞に選ばれた。最終候補者に残り、現地でのプレゼンテーション審査の結果、受賞が決まった。会場では、症例のレベルの高さに質問が相次いだ。


審査を受けている金助手（左端）



Gala Dinnerで挨拶する吉成教授

また、日本歯周病学会（JSP）理事長を務める歯科保存学講座（歯周）の吉成伸夫教授はSpecial Lecturerとして招かれ、「30 Years of Periodontal Medicine: Insights into the Link with Atherosclerotic Cardiovascular Disease.」と題して講演した。歯周医学の30年にわたる歩みをエビデンスレベルの高い論文を振り返りながら、歯周病と動脈硬化性心血管疾患との関連について、本学で得られた動物、細胞実験の結果を紹介し、大変好評を博した。

日本歯周病学会と韓国歯周病学会は、2026年で交流35周年を迎えた。両学会はこれまでも相互の学術大会への代表者派遣や講演などを通じて継続的に友好的な交流を重ね、日韓両国における歯周病学の発展と研究交流を推進した。

35周年という節目に開催された今回の学術大会は、今後のさらなる学術交流と歯周病学の発展につながる貴重な機会ともなった。

（歯科保存学講座（歯周）　助手　金　奈賢）

臨床・臨地実習に全力で臨む決意を新たに
衛生学院歯科衛生士学科 第50期生戴帽式

衛生学院歯科衛生士学科第2学年（第50期生）の戴帽式が10月1日（木）、本館7階講堂で行われた。対象となる学生74人は、教員や第1、3学年生、実習の場となる松本歯科大学病院の関係者らも見守る中、金銅英二衛生学院長から一人一人、歯科医療従事者の象徴であるキャップをかぶせてもらい、引き締まった表情で、これから約1年にわたって行われる臨床・臨地実習に全力で臨む決意を新たにした。

式であいさつした金銅学院長は「皆さんが学ばせていただく松本歯科大学病院は歯科医師、歯科衛生士を中心として様々な職種の人が患者様に安全で安心な医療が提供できるよう、一丸となって汗を流している。皆さんは現場のスタッフがどのような思いでどのような仕事をしているかを肌で感じ、将来、自分がどのような歯科衛生士になるのかを深く考えてほしい」と語りかけ、実り多い実習になることを願った。


引き締まった表情で戴帽式に臨む第２学年生

列席した矢ヶ﨑　雅理事長は、戴帽という大切な節目を迎えた第2学年を笑顔で祝福した上で、全学年に対してあらためて笑顔の大切さを説き「毎朝鏡を見て『おはよう』といい、自分の顔をよく見て、いつも笑顔をよく見て、いつも笑顔を心がけてほしい」と話した。また、健康に留意し、社会の動向にも関心を持ち、新聞を読み、今日の出来事や社説程度は頭に入れるように努力を続けて「人間形成をしてほしい」と願い、祝辞とした。樋口大輔病院長は「学んだ知識を実際に患者さんのために、自分自身のためにも生かしてほしい」と述べ、病院側として、実習を全力で支える考えを伝えた。

このあと、第2学年代表の赤羽夕萠さんが「仲間と支え合い、周囲の方への感謝の気持ちを忘れず、経験を成長へとつなげられるよう努力し、最後まで頑張ります」などと誓いの言葉を述べた。実習を終えた第3学年を代表して小山愛姫さんもあいさつし、自分自身の経験を振り返りながら、後輩たちを励ました。

高市首相の演説が 大成功で 私が焦った話

内閣官房参与
松本歯科大学理事（特命）
特命教授
飯島 勲

今月号では『プレジデント』11月13日号「リーダーの掟 飯島 勲」より、「高市首相の演説が 大成功で 私が焦った話」の記事を要約して紹介します。

9月下旬、国連総会に出席する高市早苗首相の訪米に同行してきた。1泊3日の強行軍。しかも、今回は秋の臨時国会の準備もあり、演説と記者会見が終わると、迎えの車に飛び乗って空港に向かうという本当にタイトなスケジュールだった。体力的にもかなり厳しかった。

私も首相秘書官として、その後は内閣官房参与として、歴代首相のさまざまな海外出張に同行してきたが、毎回、外務省が作成する日程表は文字通り分刻みのスケジュールとなっている。

特に国連総会は、世界各国の首脳が集まるため、多くの国から首脳会談の申し込みがあり、日程表はさらに複雑になる。国連事務総長や米国の大統領とは個別に会談を行うのが慣例となっているが、そのほかの二国間会談は、数多くの要請の中から、そのときの国際情勢などを考慮して日本側が選ぶケースが多い。

今回、高市首相が個別に会談を行ったのは、グテーレス国連事務総長、トランプ米大統領、ウクライナのゼレンスキー大統領、トルコのエルドアン大統領の4人だ。

やはり、日本で話題になったのはトランプ大統領との日米首脳会談だろう。世界中が注目していた米中首脳会談の直前ということもあり、関心が高かったのもうなずける。しかし、私が注目したのは、トルコのエルドアン大統領との首脳会談だ。日本で大きく報道されることはなかったが、現在の不安定な中東情勢を考えると、ここでエルドアン大統領と対面で会談できたのは大きいと思う。

会談では、両国の協力関係のほか、高市首相からイランと米国の問題について、「仲介の役割を果たしてきたトルコの尽力を高く評価しつつ、ホルムズ海峡において、従来どおりいかなる追加的費用もない形で全ての船舶が自由で安全に航行できることが、日本を含む国際社会全体にとって極めて重要である」と指摘したという。


第81回国連総会で演説する高市首相

エルドアン大統領からも、イラン情勢やパレスチナ問題などについての日本との緊密な連携について言及があったという。

中東情勢のキーパーソンの一人であるエルドアン大統領との良好な関係を構築できたことは、今回の訪米の一つの成果といってよいと思う。

そして、高市首相にとって初めての国連総会での一般討論演説。私は大成功だったと思う。日本の報道では、演説で「旧敵国条項の削除」を求めたことが強調されたが、現場で見ていた私は、日本の外交の軸である、「自由で開かれたインド太平洋」や「核兵器のない世界」について主張したほか、法の支配を重視する姿勢や防災に対する日本の取り組みについて説明できたのがよかったと思う。

今回のニューヨークほどでなくても、首相の海外出張のスケジュールは忙しいものだが、ときどき「総理用務」という時間が組み込まれることがある。首相としての公務ではなく個人として、現地の知人と会う約束などの時間である。「総理用務」の時間は、私たち同行者は待機時間となり、短時間なら買い物などに出かけることができる。

この連載の読者なら、私がワシントンのホワイトハウスの職員用売店を楽しみにしているのをご存じかもしれないが、国連本部の地下にある売店もなかなかいい。あまり広くないスペースに、国連オリジナルグッズがたくさん並ぶ。お土産の定番ともいえるTシャツやタオル、マグカップから、チョコレートなどの菓子類まで、すべてに国連マークがついている。私のような各国首脳の同行者や外交官、メディア関係者が多い客層からか、カフスボタンやネクタイピンなどがよく売れているらしい。私は過去にキャップを買ったことがある。今回はこの売店に寄れなかったので、ネットで検索してみたら、国連マーク入りのトランプや、国連本部ビルのスノードームや、国連限定のゴルフボールまであるようだ。

この売店もホワイトハウス同様に関係者限定なのかと思ったら、一般の観光客でも登録すれば入れるという。一般向けの国連本部見学ツアーもあり、日本語のガイドツアーもある。もちろん、国連総会開催中は入ることはできないが、訪れる機会があったら、ぜひ、私が見た景色を体感してもらいたい。

しおじり優良口腔ケア表彰式
日頃の熱心な口腔ケアを称え表彰


歯科医師・歯科衛生士により推薦された受賞者

塩筑歯科医師会、塩尻市の口腔摂食嚥下関係委員会が主催し本学が共催して5年目となる『しおじり優良口腔ケア表彰式』が10月15日（木）、塩尻市保健福祉センターで行われた。本表彰は塩尻市在住の90歳以上または75歳以上で要支援・要介護認定者のうち歯を20本以上持つ個人や、要介護者の口腔ケアに積極的に関与している家族や連携に熱心な施設を対象としており、高齢者部門、介護者部門、介護保険事業所部門の3部門について日頃の熱心な口腔ケアを称え表彰が行われた。

塩尻市に居住されている方の中から歯科医師・歯科衛生士による推薦を経て、高齢者で13人、介護者で2人、事業所で3団体が選ばれ、表彰状と記念品が贈呈された。表彰式には8人が参加した。参加が難しい方には式後、表彰状などをお届けした。

本学からは歯科保存学講座（歯周）の吉成伸夫教授が推薦した1人と地域連携歯科学講座の今井美恵教授および筆者の推薦した2人、合わせて計3人が受賞された。また今回表彰された方の中には健全歯が20本以上ある健全歯特別賞が1人おられ、百瀬文子さんが受賞した。百瀬さんは90歳で29本の歯があり、内27本が健全歯という驚異的な記録を叩き出していた。健康な歯を保つコツについてインタビューされると「歯間ブラシの使用と2度磨きをしている」と語り、丁寧な口腔ケアの積み重ねの賜物であった。

本表彰のような取り組みによって、行政・歯科・患者の繋がりが深みを増して地域医療の発展に寄与していくことが期待される。

（地域連携歯科学講座　助教　田村瞬至）

杉野凛太郎助手が講演
「人生を支える口腔ケア」
第68回北信越ろうあ者大会・第52回北信越手話通訳問題研究集会

10月3日（土）・4日（日）の2日間、松本市浅間温泉文化センターにてを主会場に「第68回北信越ろうあ者大会・第52回北信越手話通訳問題研究集会」が開催され、北信越地区（福井・石川・富山・新潟・長野）の聴覚障害者や関係者約300人が集まった。筆者は初日に、「人生を支える口腔ケア―ろう者歯科医師の視点から―」というテーマで講演する機会をいただいた。


「健康格差」などについて話す筆者

私は、生まれつきろう者であり、1歳になる前に病院にて重度の感音性難聴と診断された。感音性難聴は補聴器を付けても音が歪んで聞こえるという特性があるため、手話を母語として育った。高校卒業後、歯学部を志すも、ろう学生への教育は前例がないことなどを理由に入学に難色を示す大学も少なくなかった中で、松本歯科大学は受け入れてくださり、多くの先生方や友人の支えを得て、6年間で卒業し、歯科医師国家試験に合格できた。

歯科医師として3年目となった現在、IT機器を活用した患者とのコミュニケーションを行いながら、診療を実践している。講演ではその様子を紹介した。最後に口腔ケアに関連して、聴覚障害者の口腔の健康格差に関する国内外のデータと私自身の診療経験を紹介し、聴覚障害者が必要な医療情報や歯科医療に十分アクセスできる環境を整え、「健康格差」の解消に取り組む必要性を提言した。

11月7日（土）には、岡谷市社会福祉協議会主催の「岡谷市福祉大会」でも講演を予定している。歯科医師としての視点から、日々の診療を実践しつつ、このような活動を通して誰もが口腔の健康を守ることのできる社会の実現に貢献していきたいと考えている。

（歯科保存学講座　助手　杉野凛太郎）

創立者の「視点」

大学誌編集主幹
特任教授
笠原 浩

痛みと歯科医療⑬

10月9日（金）～11日（日）に盛岡市で開催された第54回日本歯科麻酔学会総会・学術集会に参加してきました。私はこの学会の前身の歯科麻酔研究会、さらにその昔の歯科麻酔懇談会から参画してきた人間ですので、現在の盛況には感慨深いものがあります。

歯科医療の歴史に「痛みとの闘い」の側面が大きいことは、これまでにもお話ししてきました。かつて三大激痛の首位とされていた急性歯髄炎の痛みは、19世紀半ばまでは抜歯で解決するしかありませんでした。がっちりと歯槽骨に植立している歯を無麻酔で抜去される…その苦痛に耐える患者は、多くの絵画にも描かれていて、歯科医学の歴史書などで見ることができます。私もパリのセーヌ河畔の露店で購入した版画を持っています。

ところで、近代麻酔の発明者とされるホーレス・ウェルズは、ボストン近郊の田舎町ハートフォードでささやかな歯科クリニックを営んでいた開業歯科医師でした。彼は心やさしい医療者として、抜歯をはじめ歯質の切削、歯肉の切開といった治療処置の痛みに苦しむ患者たちに同情して、なんとかそれを緩和する手段がないものかと悩んでいたに違いありません。それが1844年12月10日のコルトンの化学ショーでの笑気（亜酸化窒素）ガスの無痛効果の発見、そして自分のからだを使っての人体実験へと繋がっていったのです。

自分のからだでその有用性と安全性を確認したウェルズは、それを希望した患者に応用することを始めました。これが外科医療に革命をもたらす重大な大発見であることを確信した彼は、より広く知ってもらう必要があると考え、ハーバード大学とも関連のあるボストンのマサチューセッツ総合病院の外科部長ジョン・ウォーレンに公開実験を申し入れました。

しかしながら、この公開実験は失敗に終わりました。笑気の麻酔力は比較的弱いものであったためか、抜歯には成功したものの、次の瞬間に被験者が悲鳴を挙げたため、ウェルズは「インチキ」と罵られて退場するしかなかったのでした。

この状況をその場で見ていたのが、ボストンで開業していた歯科医師でウェルズのかつての同僚であったウィリアム・T・G・モートンでした。彼は笑気と同様な効果がある物質を探し、ハーバード大学の化学者ジャクソン博士から揮発しやすい硫酸エーテルを教えられました。

最初はイヌなどの動物実験、次いで自分の助手たちを使っての人体実験などで、その効果と安全性を確認しました。合意を得た患者にも応用して、安全かつ確実な使用法を確立していったのです。ガラス瓶に弁を付けたチューブとマスクのエーテル蒸気の吸入器も開発しました。

1846年10月16日、同じ病院で公開実験が行われました。今度は大成功でした。ピクリともしない被験者の腫瘍摘出に成功したウォーレンは「これはインチキではありませんぞ」と叫び、涙を流したと伝えられています。

私立歯科大学協会プレスセミナー

宇田川信之学長パネルリストとして活発に意見交わす

「人生100年時代、歯科医療はどう変わるべきか」

全国にある17の私立歯科大学と歯学部でつくる一般社団法人・日本私立歯科大学協会（会長＝羽村　章、日本歯科大学生命歯学部特任教授）の第17回歯科プレスセミナーが10月21日（水）、東京都のアルカディア市ヶ谷私学会館と、Web配信で開催された。協会専務理事の本学宇田川信之学長は「人生100年時代、歯科医療はどう変わるべきか」と題するパネルトークでパネリストを務め、他のパネリストと活発に意見を交わした。


左からコーディネーターの羽村会長、仲井教授、パネリストの宇田川学長、高橋教授、中原客員教授

セミナーは、歯科に関する正しい情報が広く国民に浸透することを願い、マスメディア関係者を対象に2010年から開いている。今回は「一生を通じた口の健康管理を考える、生涯にわたる歯科診療」をテーマに実施した。

羽村会長のあいさつの後、藤井一維副会長（日本歯科大学学長）が、さまざまな資料を示しながら協会や歯科医師の現状について説明し「口腔の健康が全身の健康に関係することが広く周知されてきたことにより、歯科医師の役割が多様化している」などと現状を報告した。また、需要が高まっている歯科訪問診療の課題や、歯科医師数の減少や高齢化に伴う歯科医院の地域偏在や継承の問題などについても解説した。

神奈川歯科大学歯学部小児歯科学講座の仲井雪絵教授の基調講演「小児歯科から始まる、一生涯の口腔健康管理」もあった。仲井教授は将来の口腔健康を守るため、妊娠期からう蝕予防を始めることの重要性を解説。妊娠前からのプレコンセプションケアとして捉え、家族や地域全体で取り組むことが重要であると強調した。

セミナーを締めくくるパネルトークには、宇田川学長と、大阪歯科大学歯学部の高橋一也教授、日本歯科大学生命歯学部の中原悦夫客員教授の3人がパネリストとして登壇し、羽村会長がコーディネーターを務めた。

基礎研究から歯科教育、高齢者歯科、臨床に至るまで幅広い視点から活発な意見交換が行われ、現状や課題を浮き彫りにした。

最後に質疑応答が行われ、「歯科医師は、口腔の健康を通じて患者さんの生命支援や生活支援を行うことのできる幅広い役割があるすばらしい仕事である」というポジティブなメッセージで締めくくった。

歯科衛生士学科がICT遠隔授業を開始

――定員増に伴うクラス改革、双方向の質疑もスムーズに――

衛生学院は10月より、歯科衛生士学科第3学年の講義において、ICT（Information and Communication Technology＝情報通信技術）を活用した最先端のWeb授業を開始した。各学年の募集定員が100人となり2クラス体制となったことを受けたカリキュラムおよび授業改革の一環で、新システムを導入し、対面授業と同等の教育効果が期待できる双方向の遠隔授業環境を整えた。

対面授業を行う教室とWeb授業を行う教室の間で、Microsoft Teamsを利用したオンライン配信を使って同時進行で授業を行う。講義資料は正面のプロジェクターでスクリーンに投影し、お互いの教室の様子は教卓横の43インチモニターで常時確認できる。学生は自席からマイクを使わずに発言でき、音声は別教室へも明瞭に反映され、スムーズに質疑応答ができる（システムにはマイクスピーカー「ヤマハ YVC-1000」、カメラ「サンワ CMS-V54BK」を採用）。


新しく導入したICTを活用する双方向遠隔授業

新システムは、文部科学省の示す「専修学校における遠隔授業の取り扱いについて」の通知に基づき運用し、過去の感染症流行のような不測の事態によって対面授業が困難になった際にも活用することを視野に入れている。

今回の取り組みにより、同一授業を複数回行う必要がある場面が減り、複数学級に対して統一感のある授業を展開できるようになった。教員の負担が軽減された分、今後は学生の理解度チェックや授業内容のブラッシュアップにより多くの時間を充てていく方針だ。

（衛生学院　事務室長　新村和久）

園児たち 秋のひとときキャンパスを楽しむ

自然豊かなキャンパスはさまざまな木々が紅葉し、1年で最も彩り豊かな季節を迎えている。晴れた日には子供から大人まで、地域の人たちが大勢訪れ、この時期ならではの自然を満喫している。

近隣の保育園からも、いくつものグループが散歩や遠足、自然観察でキャンパスにやって来る。園児たちは、着くとすぐに友達と中庭をかけ回ったり、気になる落ち葉や木の実を集めたり、自動芝刈り機の後を歩いたり、元気よく秋のひとときを楽しんでいる。


落ち葉を集めた袋を持つ保育園児

病院だより vol.79

健康づくりセンター

～運動を習慣化させるコツ～

「健康のために運動を始めたけど、いつの間にか続かなくなってしまう」そんな経験がある方も多いのではないでしょうか。運動は始めることよりも、続けることのほうが難しいものです。

一般的な有酸素運動（ウオーキングや軽いランニングなど）を行った場合では、脂肪燃焼の効果は、運動を始めて1～3カ月後と言われています。体重や見た目の変化はすぐには出ないため、体重や体脂肪量などの数値だけで効果を判断してしまうと、思うような結果が出ないことで、運動が習慣化する前に挫折してしまうことも。

身体は少しずつ変わっていくものなので、習慣化するまでは、数値に一喜一憂するのではなく、体を動かすと「夜よく眠れる」「気分がすっきりする」「前より疲れにくくなった」など、内面的な変化、効果にも目を向けてみましょう。

こうした変化は数値には反映されませんが、体が変わってきているサインです。すぐに結果を求めず、ゆっくり自分の変化を観察していくことも継続、習慣化のコツになります。

また仕事や家事、育児などで忙しく、健康管理のために運動を始めたくても、時間の確保が難しい方や、運動への苦手意識があり何から始めていいのか分からないという方もいらっしゃると思います。そんな方におすすめなのが、「＋10（プラス・テン）」です。＋10とは、今より「10分多く体を動かす」ことです。10分と聞くと「10分だけで意味があるの？」そう思う方もいるかもしれません。もちろん、10分だけですぐに体が変わるわけではありません。1回のハードな運動よりも、10分でも少しずつ積み重ねていくことの方が、長期的には大きな変化をもたらします。


個別の運動プログラムに沿って体を動かすセンター利用者

最初のハードルを高く設定しすぎず、「今日は10分だけ歩く」「姿勢を意識する」「エレベーターではなく階段を使う」など、できることから始めてみましょう。最初は、「少し体を動かす」くらいの気持ちで始める方が習慣にも繋がりやすいです。

今の生活を大きく変えなくても、できることはたくさんあります。まずは普段の生活の中で活動量を増やしていけるように、デスクワークが多い人は30分ごとに立ち上がるなど、無理なくできることから始めてみましょう。最初から頑張りすぎず、「またやろう」と思える程度の量からやってみることが大切です。

健康づくりセンターでは、運動を継続しやすいよう、個々の体力や目的に合わせて運動プログラムを作成し、効果を実感できるよう健康づくりのサポートをしております。ぜひ一緒に無理のない運動習慣をつくっていきましょう。見学など、お気軽にお問い合わせください。

（健康づくりセンター　健康運動指導士　大槻美佳）

鷹股哲也特任教授が講演

「歯・口の健康から全身の健康へ ―オーラルフレイルを防ごう―」

塩尻ロマン公開講座

塩尻市社会教育スポーツ課社会教育係が主催する「塩尻ロマン公開講座」が10月6日（火）、塩尻総合文化センター講堂で開かれ、「歯・口の健康から全身の健康へ ―オーラルフレイルを防ごう―」と題して、本学の鷹股哲也特任教授が講演を行った。参加した60歳以上の男女75人に向けて、老化に伴う身体の虚弱・衰えと言われるフレイルに「歯と口の健康」がどのような影響を与えているのかについて、分かりやすく語った。

歯をなくすと、多くの高齢者に「オーラルフレイル」と言われる「口の衰え＝口腔機能の低下」が現れ始める。固い物が噛めない（咀嚼障害）、食事中にものをよくこぼす、滑舌が悪くなる（発音障害）、飲み込みにくくなる（嚥下障害）、よくむせる、口が渇く、口臭がするなどが主な症状となる。また咀嚼障害により低栄養となり、加齢も加わり、サルコペニアといわれる骨格筋量の低下がみられ筋力が衰えてくる。筋力が衰えると日常の活動量が減り、食欲がわかなくなる。当然、食事をする量が減り再び低栄養へと繋がる（フレイルサイクル＝「身体的フレイル」「認知的フレイル」「社会的フレイル」）。鷹股特任教授は、このようなフレイルから要介護状態へとドミノ倒しのように進む「負の連鎖＝フレイルドミノ」を防ぐ必要があると語った。



オーラルフレイルは早期の対策が重要と説く鷹股特任教授

講演の後半では、お口の体操、舌の体操、唾液腺相当部のマッサージ、谷川俊太郎氏の詩を使ったパラタカ発音訓練を行い、「これらを日常の生活に取り入れてオーラルフレイルを予防し、ひいてはフレイル予防に繋げることが重要である」と強調した。健康長寿を達成する3つの重要な柱として「栄養（食と口の健康）」「適度な運動」「社会参加」の実践を呼びかけ、約2時間にわたる講演を結んだ。

Alumni News
松本歯科大学校友会

第73回全国歯科大学同窓・校友会懇話会
「サステナブルな同窓・校友会を目指してⅡ、原点回帰と進化の調和」をテーマに活発な討論

全国の歯学部・歯科大学の同窓・校友会が一堂に会する懇話会が、毎年各大学が持ち回りの当番校となって行われてきた。歯学部卒業生の立場から、各同窓・校友会のその時々の歯学教育のサポートについて、意見を交わすことを目的としている。今年は朝日大学歯学部同窓会の主催により10月24日（土）、名古屋市の名古屋マリオットアソシアホテルにて開催され、全国国公私立の同窓・校友会28校の代表が顔を揃えた。

73年間の歯学教育の変遷を踏まえつつ、国公立と私立あるいは伝統校と新設校などの各大学の立ち位置の違いがある中で、それぞれの大学が持つ問題点と対応策などを紹介し、活発な討論が行われた。今回は「サステナブルな同窓・校友会を目指してⅡ、原点回帰と進化の調和」がテーマとされた。立場の違いはありながら、抱える問題点は共通することが多く、改めて本懇話会の存在意義が認識された。協議に続いて、イグノーベル賞受賞者の渡部　茂先生（朝日大学客員教授・春日井製菓株式会社顧問）による「唾液―口腔の健康を支えるメカニズム」の講演が行われた。歯科における基本的な研究領域と言える唾液研究のこれまでの知見や最新の研究成果が披露され、歯学教育における研究の重要性と魅力を説かれた。本学校友会からは会長、副会長らが参加し、懇話会懇親会でも他の同窓・校友会の代表と緊密な関係を発展させることができた。

（校友会常務理事　13期生　川原一郎）



懇親会で主催校として挨拶をする朝日大学の田村康夫副学長

10回目の「6期会」、講演会・懇親会を開催
歳を重ねて時の流れのはやさを改めて実感

6期生は1977（昭和52）年の入学から今年で50年目を迎えました。「6期会」は、卒後10年経過した頃からほぼ4年ごとに開催しており9月12日（土）、節目となる10回目を、母校の創立30年記念棟大会議室で、28人が参集し、にぎやかに開催しました。ひとえに長年事務局を担当している小笠原　正先生、会計担当の中村晋一先生のおかげです。

「6期会」はこれまで、同期生を講師に講演会を開催してきましたが、今回は金融経済教育機構（J-FLEC）講師の原　元士様をお迎えし、「豊かな老後のために知っておきたいお金の話」と題し講演をしていただきました。巷では定年を迎える年代ですが、同期生の多くは現在も現役で仕事をしています。とはいえ、いずれ訪れるリタイヤ時期に備え、何から手をつけたら良いかを考えるよい機会となりました。

その後の懇親会は、図書会館内の中国料理レストラン「スターダスト」に移動して行いました。学生時代の思い出話に花を咲かせながら、卒業アルバムの写真を映したスクリーンを背に一人ひとりが近況を報告しました。歳を重ねた仲間たちの姿を目の当たりにし、時の流れのはやさを改めて感じました。また、6期生の1割となる23人が鬼籍に入っており、彼ら彼女らを偲び、思い出を語り合いました。

「生涯現役」という力強い声が飛び交う中、小穴　実会長から「次の『6期会』は、多くの6期生が古希を迎える2年後の開催を目指す」旨の宣言があり、お開きとなりました。さあ6期生2年後にまた集まろう。

（「6期会」幹事　6期生　山田和昭）


２年後に再会を期す「６期会」の出席者

長野縣護國神社の名物イベント「泣き相撲」
大盛況だった本学「お口すこやか教室」

スポーツ日和の快晴となった10月12日（月・祝）に、長野縣護國神社（松本市）の名物イベント「泣き相撲」が開催された。「泣く子は育つ」という諺（ことわざ）がある
子どもにブラッシング指導をする阪西歯科衛生士

ように、赤ん坊が大声で元気に泣く事は、心肺機能の向上に寄与する成長発育上の重要な役割を持つ。また、その泣き声により物の怪が退散したとの言い伝えもあり、邪気を祓（はら）い福を招くものとも言い伝えられている。そこで、子どもたちの健やかな成長と社会の安寧を願い、本イベントが毎年開催されている。

当日、季節外れの強い日差しが差し込む神社内に、生後6カ月から2歳までの小さな力士160人とその保護者が詰めかける中、『泣き相撲会場』より泣き声の響く会場』として名物コーナーとなっている本学の「お口すこやか教室」が、今年も関係者からの大きな期待を受ける中で開設された。本年度の「お口すこやか教室」は、筆者および歯科保存学講座の出分菜々衣准教授の歯科医師2人と、歯科衛生士3人（笠原由香、阪西あい、落合優希乃）、また法人（総務）李　炳旭課長補佐の合計6人による活動となった。

設営作業を終えると、すぐに多くの受診希望者が「お口すこやか教室」を訪れ、歯科相談とブラッシング指導が絶え間なく繰り返される、例年通りの大盛況となった。活動終了時には、スタッフ一同疲労困憊となったものの、受診した保護者から寄せられた多くの好評に心が満たされ、子どもたちの元気な泣き声により邪気が祓われ心身が清められる清々しい一日となった。

大人気の本イベントは、すでに2027年の参加者募集が始まっており、今回参加したスタッフ一同、また来年も元気な笑顔と泣き声で「お口すこやか教室」が満ち溢れる事を心待ちにしている。

（小児歯科学講座　准教授　正村正仁）

2026年度 大学、病院の防火・防災訓練
いざというときのために！
通報連絡、初期消火、避難誘導など各種訓練を実施

地震や火災の発生を想定した本年度の防火・防災訓練が10月6日（火）、大学と病院でそれぞれ行われた。職員や学生が避難行動や消火設備の取り扱い方などを再確認し、万が一の事態に遭遇しても適切に行動できるよう訓練した。

職員対象の訓練は、創立30年記念棟北側広場での消火訓練で始まった。参加者は広場中央に設けた「火元」に向かって消火器で消火剤を噴射し、初期消火などに重点を置いて実施した。参加者たちは、いざというときの行動や避難器具の取り扱いなどを体験し、改善すべき点など、今後の課題を洗い出していた。訓練の最後に事務局は「通報連絡、初期消火、避難誘導ともスムーズかつ適切に行えていた。訓練したことを実際の有事の際には役立ててほしい」などと講評した。


本館南棟4階屋上から斜降式救助袋の降下訓練

その後、実習館総合歯科医学研究所で火災が発生したとの想定で実施した。歯学部生は実習館の教室で、衛生学院生は講義館の教室でそれぞれ地震発生時の安全確保のためのシェイクアウト訓練を実践したあと、中庭のモニュメント付近に設けた訓練本部まで、安全を確保した上で最短ルートを通り、迅速に避難した。地震発生時、歯学部第1学年生の授業を担当し、学生を実習館から避難誘導した解剖学講座の田所　治教授は、学生たちを前に訓練を振り返り「真の災害はいつどのような状況で起こるか分からない。今日の訓練を機に日ごろから災害に備える意識をさらに高めてほしい」と述べた。

大学病院関係者を対象にした訓練では、病院2階技工室から出火したとの想定で、入院患者や外来患者の避難誘導と、初期消火などに重点を置いて実施した。参加者たちは、いざというときの行動や避難器具の取り扱いなどを体験し、改善すべき点など、今後の課題を洗い出していた。訓練の最後に事務局は「通報連絡、初期消火、避難誘導ともスムーズかつ適切に行えていた。訓練したことを実際の有事の際には役立ててほしい」などと講評した。

理事会発令

〔役職教員〕
10月1日付
吉成　伸夫（副病院長）

人事異動

〔出向契約終了〕
9月30日付
野澤　良子（法人（総務）出向受入職員）

〔定年延長〕
10月1日付
中西　正人（2027年9月30日まで臨床検査室臨床検査技師主任）

（小児歯科学講座　准教授　正村正仁）

11月行事予定

4日(水)　入学試験（衛生学院）
5日(木)　総合型選抜Ⅰ期／社会人選抜Ⅰ期
5日(木)　合格者発表（衛生学院）
5日(木)～6日(金)　総合型選抜Ⅰ期／社会人選抜Ⅰ期
6日(金)　演習Ⅴ（第6学年）
8日(日)　献血
一日体験入学（歯学部）
24日(火)　Ⅳ期試験（第6学年）
25日(水)　入学試験（歯学部）
学校推薦型選抜（公募制・指定校）／校友子女選抜
30日(月)　大学院発表会
Ⅱ期試験（第5学年）

第102回 松本歯科大学学会（例会）

日　　時　：11月26日（木）　午後5時30分～6時（予定）
会　　場　：本館1階学生ラウンジ
プログラム：一般講演（ポスター発表）
演題申込みおよび事前抄録締切：11月6日（金）　午後5時
問い合わせ：松本歯科大学学会集会幹事（川原一郎）内線 2236

Matsumoto Dental University
SNS Information

受験生の皆さんへ
見せてほしい　君の個性　君の情熱
学校推薦型選抜（公募制）
学校推薦型選抜（指定校）
校友子女選抜
●試験日
11月25日(水)
●出願期間
11月2日(月)～11月19日(木)
●試験場
本学
■お問い合わせ■
HOT LINE 0263-54-3210
松本歯科大学　入試広報係
www.mdu.ac.jp